科目名	分子生物学演習	分野・必選別・単位数	専門科目(臨床検査医学)	選択	2単位

担当教員	◎教授　鈴木幸一　　講師　関　玲子　　講師　押鐘浩之						
課程	博士前期	配当年次	2年	配当学期	通年	授業方法	演習

授業の概要	実際の一塩基多型、タンデムリピート配列多型データをもとに、連鎖分析の方法論を理解するとともに、より臨床検査での有用性の高い発現プロファイル解析やタンパク質2次元電気泳動データ解析などの方法論を学び、こうした新しい分子生物学的手法を診断や病型分類へ応用できるようにする。
授業の到達目標	①分子生物学的研究手法の機序を概説することができる。 ②検体や解析目的によって適切な解析手法を選択することができる。 ③分子生物学的実験によって得られるデータの解釈と、その限界を説明することができる。

授業計画

回数	担当者	行動目標
1	鈴木　幸一　　教　授	原因遺伝子同定方法、遺伝子多型の利用法、分子系統樹作成手法と原理について説明できる。①
2	鈴木　幸一　　教　授	原因遺伝子同定方法、遺伝子多型の利用法、分子系統樹作成手法と原理について説明できる。②
3	鈴木　幸一　　教　授	原因遺伝子同定方法、遺伝子多型の利用法、分子系統樹作成手法と原理について説明できる。③
4	鈴木　幸一　　教　授	原因遺伝子同定方法、遺伝子多型の利用法、分子系統樹作成手法と原理について説明できる。④
5	押鐘　浩之　　講　師	一塩基多型などの原因遺伝子探索のための遺伝学的手法を用いて、疾患における遺伝的素因のインパクトを推定できる。①
6	押鐘　浩之　　講　師	一塩基多型などの原因遺伝子探索のための遺伝学的手法を用いて、疾患における遺伝的素因のインパクトを推定できる。②
7	押鐘　浩之　　講　師	一塩基多型などの原因遺伝子探索のための遺伝学的手法を用いて、疾患における遺伝的素因のインパクトを推定できる。③
8	押鐘　浩之　　講　師	一塩基多型などの原因遺伝子探索のための遺伝学的手法を用いて、疾患における遺伝的素因のインパクトを推定できる。④
9	押鐘　浩之　　講　師	一塩基多型などの原因遺伝子探索のための遺伝学的手法を用いて、疾患における遺伝的素因のインパクトを推定できる。⑤
10	関　　玲子　　講　師	微生物の分子系統樹作成手法を、患者から検出された細菌に関して応用し、原因菌同定や分子系統樹作成を通して感染の拡がりを推論できる。①
11	関　　玲子　　講　師	微生物の分子系統樹作成手法を、患者から検出された細菌に関して応用し、原因菌同定や分子系統樹作成を通して感染の拡がりを推論できる。②
12	関　　玲子　　講　師	微生物の分子系統樹作成手法を、患者から検出された細菌に関して応用し、原因菌同定や分子系統樹作成を通して感染の拡がりを推論できる。③
13	関　　玲子　　講　師	微生物の分子系統樹作成手法を、患者から検出された細菌に関して応用し、原因菌同定や分子系統樹作成を通して感染の拡がりを推論できる。④
14	関　　玲子　　講　師	微生物の分子系統樹作成手法を、患者から検出された細菌に関して応用し、原因菌同定や分子系統樹作成を通して感染の拡がりを推論できる。⑤
15	関　　玲子　　講　師	微生物の分子系統樹作成手法を、患者から検出された細菌に関して応用し、原因菌同定や分子系統樹作成を通して感染の拡がりを推論できる。⑥

事前事後学修の内容およびそれに必要な時間		
	【事前学修】	指定したテキストの次回授業部分を事前に読んでおくこと。 次回の授業内容を予習し、用語の意味等を理解しておくこと。
	【事後学修】	授業中の疑問点をまとめ、関連する文献等を利用し、次回授業までに解決しておくこと。
	【必要時間】	当該期間に30時間以上の予復習が必要。
教科書	随時　指示する。	
参考書	随時　指示する。	
成績評価の方法および基準	口頭試問70%、授業内課題30%	
その他履修上の注意事項	試験やレポート等に対し、講義の中での解説等のフィードバックを行う。 カリキュラムマップのDP1が、この科目と本専攻の学位授与方針との関連を示している。	